

教室でのコミュニケーションを活発に生み出す 教師の言葉かけ・働きかけ

—目標構文を取り入れたタスク・ベースの英語指導案の考察—

大阪教育大学大学院連合教職実践研究科
高度教職開発専攻
学籍番号 179967
氏名 岩城 香織
主指導教員 柏木 賀津子

1. 背景

1.1 先行研究と目的

学部の教育実習の経験から小学生の頃から英語授業を受けているが、中々英語を話せない、自信がない生徒が多いことが分かった。ベネッセの全国学力調査（2017）からは、英語を書けるが話せない生徒の割合が多く、英語嫌いの原因になるかと考え、まずは好きになって貰おうとテーマ設定を行った。本実習の目的は、(1)中学校でスピーキング・ライティングを通じた表現活動を行い、4技能を総合的に育成すること、(2)グループ、ペア活動にタスクを取り入れた効果について考察することであるタスクでは、「意味伝達の重視」「明確な場面設定」を行う。これにより積極的に情報や考えを適切に伝える能力を高めることを目標とする。またそのためには、教師の声掛けはどうあるべきか生徒はどうすれば動機を高めるか応用行動分析を用いて、授業観察を行い、授業作りに活かすこととする。

1.2 実践研究 1

本実践では、英語に関するアンケート調査を行い、どのようなタスク活動を行いたいかを調べた。その結果、学年が上がるにつれて英語が苦手な生徒が多いことが明らかになった。語彙や文法を活用する力が不十分であると考えた。中学校での学校実習では、大阪市の公立中学校で授業実践を行った。『STAR WARS』の映画ポスターと監督の説明をしている単元において、関係代名詞（例：This is a director who produced ～.）を扱っている。実践では、映画のポスターをパワーポイントで紹介し、目標文構造を使った登場人物の紹介クイズを作るタスク活動を行った。中学校3年生（2クラス、51人）を対象に、授業の流れとしては、文法理解、タスクを使った練習、関係代名詞の使用を考えてクイズを作成させた。自己評価（4件法）をもちい、生徒が書いたクイズをルーブリック（1～4）で評価した。評価から目標表現は上手く使えなくても、既習文法を理解し積極的に書く生徒が見られたのはタスクの良さであると示された。

1.3 実践研究2

大阪教育大学附属平野中学校では、英語、他教科の授業観察を行った。授業観察を通して、生徒の主体性を養うには教師の介在的な「言葉かけ」が重要であると考えた。そこで生徒を支援するために出来ること、出来る時に注目して教員の言葉かけ働きかけを考察した。応用行動分析のABC分析を使い、どのような結果があると、望ましい行動を繰り返せるのかをA(行動の前)→B(行動)→C(行動の後)で表で表した。望ましい行動を増やすためには、具体的に望ましい行動を言葉で褒めることが大切であることが分かった。

1.4 実践研究3

本実践では、英語、他教科の授業観察に加え、総合的な学習の時間「JOIN」のポスターセッションにも参加した。授業外でも生徒と関わる時間が多く持てたことにより、先生方は、常に生徒を観察し気になる生徒に声をかけていることに気付いた。この光景をみて、先生方の情熱は、生徒たちの意欲に繋がり、生徒たちが愛情として受け取っていると感じた。これについて北口(2010)は、以下のように考える。応用行動分析では、子供の行動を引き出す(消す環境)を整備することに繋がると示している。そこで、心のものさしを沢山持ち、生徒の可能性を信じてみる大切だと思った。(北口, 2013)

1.5 結論

以上の実践から結論は以下の2点である。

1点目は、書く活動の際モデル例文提示やパワーポイントでスクリプトを表示することで発話を引き出し、アイデアが浮かぶように、ヒントを与える「梯子かけの活動」を取り入れることである。またモデル文を参考に書いたり、目標文法や目標構文を使い英文を作成するなどの活動を通して、英語を活用する経験によって積極的に参加する姿勢が見られた。生徒たちは、内容への興味や面白さから、英語を聞き、真似して話していた。その結果、自分の考えや思いを相手に伝える言語能力を育成することができると思った。

2点目は、生徒が集中して取り組むことができるよう、庭山(2017)の研究から、教師は、色々な発問や質問を考え生徒の状況にあわせて、望ましい行動をいきなり目指すのではなく、望ましい行動に近い行動、スモールステップから取り組み始めるのも良いと分かった。内容のあるペア、グループ活動を取り入れることで、生徒同士のインターアクションが盛んになっていったことから、タスク活動は有効であったと考えた。また一方、北口(2010)が示した応用行動分析を使った科学的アプローチから子どもの行動を客観的に観察し、行動の原因を論理的に分析し、行動を引き出す(消す)環境を整備することが大切であると言える。本実践により、今後の意味あるタスク活動を用いて、思わず他の生徒に伝えたいように設計された課題や場面を学習の中に盛り込むことが必要であると学んだ。将来的に生徒が学び続けられるような授業作成に励みたいと思う。